

2 せん定作業

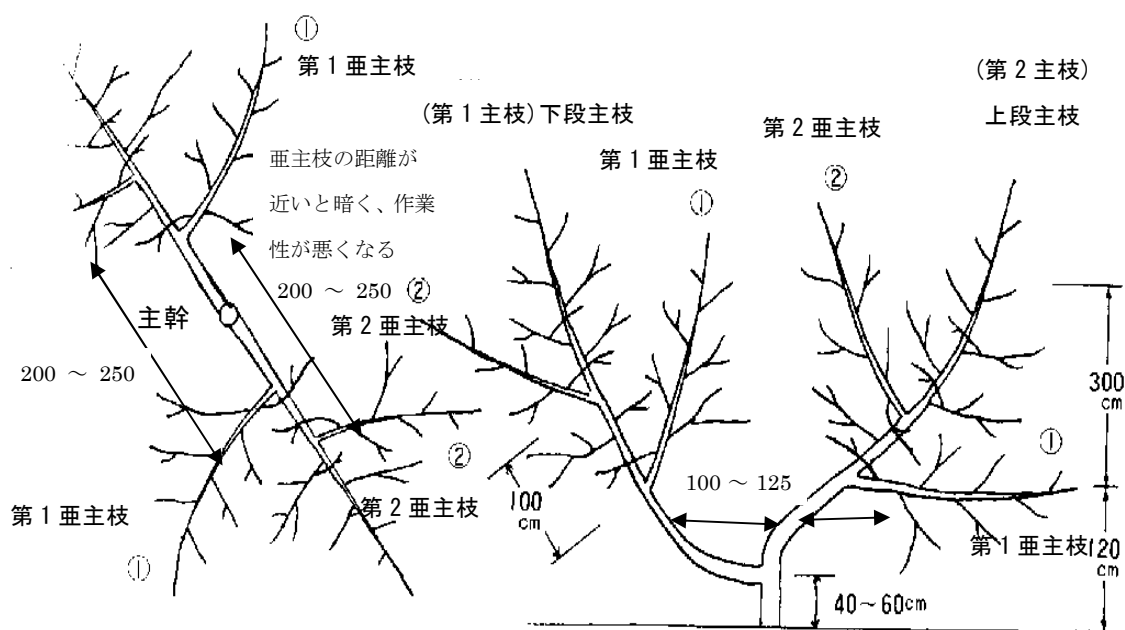
美味しいももを収穫するためには、せん定作業によりバランスよく枝を配置し、太陽の光を受け光合成により作られた栄養分を果実に蓄えさせることが必要です。

- ・仕立て方法は様々ありますが、作業を効率的に行うため開心自然型と低樹高疎植栽培（篠ノ井流大草仕立て・大藤仕立て）を推奨しています。
- ・樹間を広くし樹を低く仕立てることで、日当たりの確保と防除等の作業性が向上するほか、脚立作業を少なし作業負担が軽減されます。
- ・もも栽培では収穫から落葉までの期間に、来年の花芽の充実が図られます。混んでいると花芽が充実しません。光を当て花芽を充実させるため、秋季せん定を行いましょう。

(1) 開心自然型

2本主枝を枝が手のひらを広げたような形で、間隔をなるべく均等に配置し、大枝が垂直ではなく斜め45度くらいで広がるようにします。

3本主枝は側枝の扱いが難しいため勧めていません。



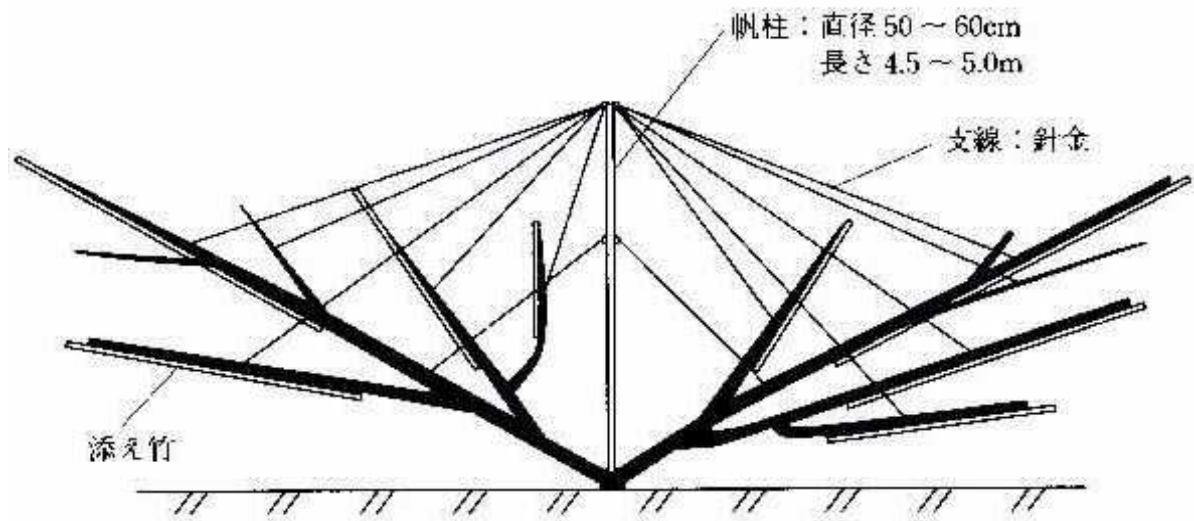
開心自然形仕立ての目標樹形

(2) 大草流

本仕立ては開心自然形をより低くした樹型で、樹高を3.5~4.0mに抑えるために主枝の分岐点を低くします。

垂主枝は、主幹から一定距離をおいて放射状に誘導し、逆さ円すい形の斜面に配置します。このとき主枝、垂主枝の先端は果実の荷重による下垂を防ぐため竹などの「添え木」で固定し、帆柱からの針金で吊り上げます。側枝は下垂させず、切り戻しを繰り返しながら最長1m程度を維持し、やはり円すい形の斜面に配置します。発生する枝をすべて斜面に誘導するので、上下の関係で重なる側枝がなくなります。中短果枝を中心に着果させるので果形が安定し、結果部位を主枝、

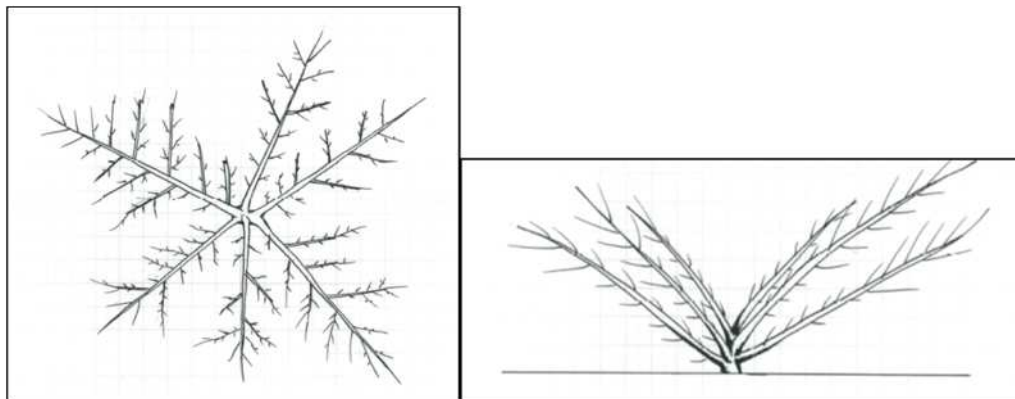
垂主枝の近く配置するので養分の流れが円滑になり、着果量を密にしても十分な玉張りを得ることができます。



(3) 大藤流

大藤流の仕立て方は、早期収穫と肥沃土壌での強勢調節と果実品質の安定を目指したものです。多くの主枝候補枝を低い位置から車枝上に発生させ、牽制枝の活用と着果調節によって3～3.5mの低樹高に導きます。成木では、3～4本の主枝となるが垂主枝は作らず、弱せん定により、80～90%を短果枝で構成します。

若木時代から品質の安定と多収を目指す仕立て方です。



《大藤仕立て上図》

《大藤仕立て横図》

(4) 秋季せん定

秋季せん定は、樹を落ち着かせる効果があり、糖度の高い良質なももが生産できるほか、生理落果の防止になります。

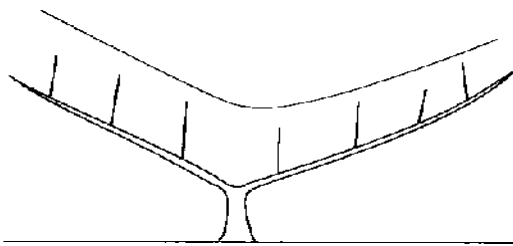
もも栽培の収穫から落葉まで一定期間に来年の花芽の充実が図られます。このとき、強樹勢など、枝葉が混み合っていると花芽が充実しないので、光を当て来年使う花芽を充実させるために、秋季せん定を実施します。

ポイント

- ・もも等の核果類は太枝などを切ると傷口の癒合が悪く、そこから枯れ込みが入りやすいが、秋季はまだ樹液流動があるので、枯れ込みが入り難いです。

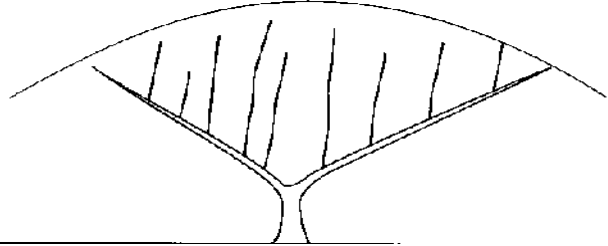
- ・冬季のせん定よりも、受光体制が良く見えるため、樹形の調整がしやすいです。
- ・秋季のボルドー散布など薬剤防除効果が高くなります。
- ・ハダニ等で落葉している場合はせん定を実施せず、徒長枝を切る程度とします。切り過ぎは凍害発生を助長します。

生育のよしあしの判断と秋季せん定の判断



良好な成育の樹

- ・主枝の角度に合わせて徒長枝がV字に分布
- ・秋季せん定はほとんどしなくてよい



悪い成育の樹

- ・主枝基部から強い徒長枝が出て、山型になっている。
- ・主枝を中心に徒長枝せん定する

秋季せん定で切る枝

